

談 日 語 長 句 漢 譯

陳 岩*

摘要

日語的長句，不論在理解上，還是在翻譯時，對國人都是難題。我們平時發現的日譯漢誤譯，絕大多數都是發生在長句上。

本文將首先提出通過翻譯實踐總結出的「長句分析法」，並用此方法進行實例分析，然後分「複句的拆譯」「長定語的翻譯」「長補語的分析」「長狀語的分析」三部分進行譯法研究，最後歸納出具有傾向性的「結論」。

一 長句分析方法。在本章，具體做法概括為 32 個字：「從後向前，以謂為綱，分清主調，賓及補狀，定語歸屬，認清莫盲，層次剖析，幹枝明朗」。

二 複句的拆譯。本章對表示轉折、遞進、因果、假設、並列等複句的拆譯進行分析。

三 長定語的翻譯。本章將從「修飾主語的長定語」和「修飾賓語的長定語」兩個方面進行論述。

四 長補語的翻譯。本章對表示存在場所、移動的到達點、動作對方、原因、時間的起點、共同動作者，動作的場所等的助詞「に」「で」「から」，根據具體情況採用「順譯」「拆譯」等方法，對於「引用助詞『ト』」採取「倒譯」的方法，並以例句進行說明。

五 長狀語的翻譯。本章通過日語中的最具代表性的「動詞＋助動詞連用形（ように）」「動詞＋ほど（に）」「テ形」的翻譯，歸納了常見的長狀語的翻譯方法。

六 結論。根據各種實際譯例分析，總結出「倒譯」「拆譯」「指代下連」「成分轉換」等翻譯方法。

關鍵詞：長句、翻譯、定語、補語、狀語

* 大連外國語學院教授

日本語の長い文の翻訳について

陳 岩*

要旨

日本語の長い文は中国人にとって、理解する上にも、翻訳する上にも厄介な問題である。普段我々の目に付いた誤訳の大多数はこういう長い文に見られる。

この論文ではまず翻訳の実践から纏めた「長い文の分析法」を提出し、この方法を用いて実例分析を行い、それから「複文の部分訳」「長連体修飾語の翻訳」「長補語の翻訳」「長連用修飾語の翻訳」など四つの部分に分けて翻訳法を考え、最後に方向を示し、「結論」に導く。

* 大連外国語学院教授

談日語長句漢譯

陳 岩

前 言

日語是粘著語，活用詞有詞尾變化，而且還有豐富的助詞、助動詞及「こと」「の」等形式名詞。這些為日語造成了極強的結構能力，使得它的句子可以自由延長。再加上日本文化及印歐語的影響，日本人養成了使用長句的習慣。日語中的長句有的多達數百字，往往句中有句，大句含中句，中句含小句，結構十分複雜。

漢語句子以簡潔為傳統。古代文章自不待論，現代文章中也很少用特別長的句子。有人對用現代漢語寫的文藝作品、政經文章和科技文章做過調查，發現句讀之間平均不足 9 個字。當然，近來也有人專寫長句，修飾語套修飾語，數百字無任何標點符號。但這畢竟是個別的。就總的情況看，以漢語為母語的人不僅習慣寫短句，也習慣讀短句。

日漢語句子的長短如此不同，給國人理解、翻譯日語帶來了困難，我們平時發現的日譯漢誤譯，絕大多數都發生在長句上。基於此，本文首先提出通過翻譯實踐總結出的「長句分析方法」，並用此方法進行實例分析，然後分「複句的拆譯」「長定語句的翻譯」「長補語句的翻譯」「長狀語句的翻譯」四部分進行譯法研究，最後歸納出具有傾向性的「結論」。本文中所使用的「定語」為日語的「連體修飾語」，「補語」為「補足語」，「狀語」為「連用修飾語」，「賓語」為「ヲ格」「補足語」。

1. 長句分析方法

形成長句有兩個基本因素：一是並列成分或分句多；二是修飾語長。但不管成分如何複雜，字數如何長，歸根到底都是由短句擴大或由簡單句聯合而成的。因此，分析長句首先要找出作為主幹的、最基本的簡單句，然後再順蔓摸瓜，理清各個枝杈。具體作法可以概括為以下 32 個字：以謂為綱，辨清主謂，從前向後，賓及補狀，定語歸屬，

認清莫盲，層層剖析，幹枝明朗。

例[1] 旅という言葉をつぶやくとき、わたしが真っ先に思い浮

①

かべる情景は、煤煙くさい列車のボックスに四人、見知らぬ者ど

②

うしが腰掛けて所在なくしゃべっており、時に「まみかんでも

③

どうぞ」と自分が食べかけた人がその袋のいくつかをすそ分けしたりする風景である。

1.1 以謂為綱，辨清主謂

日語句子的核心是謂語，謂語具有統一全句各種成分，完結句子的功能。長複雜句中可能包含著並列的分句或定語、狀語等從句，分句、從句中可能也有謂語成分。但分句、從句中的謂語成分只與該分句、從句有關，而不關聯到全句。我們所要「為綱」的，是與全句有關聯的句末的謂語，也可稱其為「核心謂語」。分析上面的例句，不難看出，句末的「風景である」就是全句的「核心謂語」。

找到「核心謂語」後，要進一步辨明全句總的主謂關係（不是分句、從句的）。這裏所說的「主」，指的是主題和主語（主題關聯全句，直到句末，主語一般只關聯到靠近的謂語）。一般結構複雜的長句都有主題。

主題指示全句的主題或敘述範圍，同時又是句中的基本成分之一（或兼做主語，或兼做狀語，或兼做賓語……），它關聯全句。直至句末。核心謂語起著統一全句各種成分（包括主題）的作用，所以它也關聯全句，直到主題。這樣，主題和核心謂語就有了統一性。可以說，主題和核心謂語能聯在一起組成一個合乎邏輯的概念。上述例句中的「……情景は……風景である」就是全句總的、基本的主謂關係。

1.2 從後向前，賓及補狀

分析長複雜句一般採取從後向前的順序，即找出句末核心謂語，辨清總的主謂關係之後，就要找出核心謂語的賓語和狀語。上面所舉

名

例[2] 戦争がすむ迄、たとい喜一が死んでしまっていたにもせ

⑤⑤

よ、佐喜枝は自分が喜一につながって生きていると信じることが

④

③

出来ていたのだが、戦争が終わって、それも無惨な敗戦であって

⑧

みると、喜一の死んだことなどまるで何のために死んだのか佐喜

⑦

枝にはわからなくなり、喜一につながって生きていると信じてい

②

た自分までが、根なし草のように頼りないものと思えはじめたの

⑥

①

だ。(田宮虎彦、『銀心中』)

這是一個結構複雜的、轉折關係的長複句。按照前面所說的長句分析方法，首先可以找出後一個句子的核心謂語①「思えはじめた」及與其並列的謂語②「わからなくなり」，然後找出前一個句子的核心謂語③「信じることが出来ていた」，而主題比較明顯，即前後句中的「佐喜枝」。分析到這裏，基本上清楚了句子的骨架，即：「……佐喜枝は……と信じることが出来ていたのだが……佐喜枝にはわからなくなり……と思えはじめた」。找到謂語、主語（主題）之後，我們再分析前後兩句的其他成分。先看前句，按「從後向前，賓及補狀」的方法，應該找出核心謂語的賓語，但「信じることが出来ていた」並非「他動詞」，前接不是賓語，而是由「引用助詞」表示的補語，即④「自分が喜一につながって生きていると」部分；而⑤「戦争がすむ迄、たとい喜一が死んでしまっていたにもせよ」則是狀語。再看後面的句子，「思えはじめた」前接的也是由「引用助詞」「と」表示的補語，即⑥「喜一につながって生きていると信じていた自分までが、根なし草のように頼りないものと」部分；而另一個並列謂語「わからなくなり」前接的也是補語，即⑦「喜一の死んだことなどまるで

補 狀 謂

還有一些更細小的分析，這裏權且省略。

2. 複句的拆譯

在表示轉折、遞進、因果、假設、並列等關係的日語複句中，各段落之間的邏輯關係相對獨立，而按照漢語表達習慣又不便於譯成一句的時候，可以考慮做拆句處理。

例[3]飽きる理由はいろいろだった。流行に釣られて飼ってはみたものの、毎日の世話が思いのほかめんどろうだつたり、大きくなならないペットのつもりで買ったのにどんどん肥大するので当てがはずれだつたりして、じゃまになる。

○厭膩的理由各有不同。有的是趕時髦養了一條狗，卻沒想到每天飼養照料竟有意想不到的麻煩；有的原以為是不會長大可供觀賞的愛物才買的，可是它卻意想不到地漸漸肥大起來，成為累贅。

句中的两个「……たり」構成兩個並列關係的句子，譯成兩句，使得層次分明。

例[4]見ていると遠くからわざわざ小型トラックでステレオセットや洋服ダンスを捨てにくる人もいて、ちょっと見ると嫁入り支度でもはじめたのかと思うようだった。

○眼看著，有的人從遠處特地開著小卡車把身歷聲、大衣櫃等拉來丟掉。乍一看，就像是開始為女兒準備嫁妝一樣。

開始的「見ていると」看到的是具體的場面，後面的「ちょっと見ると」是比喻的說法。譯成兩句，既有視覺上的間隔，又使得敘述得到了深化。

例[5]どこのだれかわからない——ひょっとしたらすぐ近くに住んでいるのかもしれない——よその子供のお古をわが子に使わせるのは、父親としてはなはだ心痛むことだが、盗んだ品物ではないのだから恥じる必要もなかった。

○把不知何處何許人（也許扔車人就住在附近）的別人家孩子的舊東西給自己孩子用，作父親的心理是非常難受的。但這不是偷來的沒有

必要害羞。

把轉折關係的複句拆譯為兩句，使轉折的語氣更為強烈。

例[6]山陰なまりでなにか村の役場の人事をしきりに憤っている人物がいるかと思えば、満州での苦労を懸命に語りかける人がおり、「どちらまで」という最初の挨拶から、「いやどうも」という簡単な別離まで、時にはうるさいなと思うほどに話の花が咲いたものだった。

○既有操山陰口音的人不住憤慨地議論著村公所的人事問題，也有的人拼命對人講述他在中國東北吃的苦頭；從開頭的寒暄「您到那兒去？」到說聲「啊，多謝了！」而簡單地告別，談得熱鬧非常，有時甚至令人感到絮叨。

這個句子中，由「……かと思うと」和「……から、……まで」組成了兩個並列從句，修飾句末的謂語，譯成兩句使得層次清楚，符合漢語表達習慣。

例[7]ブーアステインは「幻影の時代」の中で、旅行は現代ではスリルと「苦労(travail)」を味わうものではなくなり、観光旅行業者の設定した軌道をひたすら滑って行く疑似経験にすぎなくなったと嘆いているが、旅の変化は目標を自分で選択するかいなか、冒険的要素を含むかいなかという点だけではないと思われる。

這個句子雖然很長，但結構並不複雜，是一個具有轉折關係的複句。譯成兩句，可以使作者的主張更為明確地表現出來：

○布林斯丁在《幻影的時代》中感歎說，在現代，旅行已經不是嘗試驚險和辛勞(travail)的事情了，它不過是成了一種虛擬的體驗，按照旅遊業者安排的軌道而一味向前滑走罷了。但我總覺得，旅行的變化，不僅僅在於是否由自己來選擇目標，或者是否含有冒險的因素等方面。

例[8]私は都会育ちだが、戦争中、父の故郷である北陸の農村に一年半疎開し、農業を営んでいる叔父の手伝いなどしたから、苗代作りに始まり、田植え・田の草取り・はさ掛け・脱穀などに至る一連の仕事が、どのような労働を伴うものであるかをかなりよく知

っているつもりでいる。

這是一個因果關係複句。但句中的語氣不在於強調因果，而只在於合乎邏輯的敘述，所以不一定非譯出「因為」「所以」不可。像下面這樣譯成兩句，顯得很貼切、自然。

○我是在城市裏長大的，戰爭期間疏散到父親的故鄉北陸農村達一年半之久，在那裏給經營農業的叔叔幫忙。從作秧田開始，舉凡插秧、稻草除草、搭曬稻捆，直到脫粒等一系列農活都是什麼樣的勞動，我自己認為是相當熟悉的。

例[9]何か重量感のあるものが床におっこちる音と、瀬戸物が割れる音に目を覚ますと、すでに日が暮れて、真暗。

○不知是什麼，噹啷一聲掉在地板上，頗有點重量感，接著又是一聲，好象瓷器摔碎了。他睜眼一看，已是日落西山，暮色蒼茫。

聲音、動作雖然是一步接一步，但還是有間隔的，譯成三句，使得聲響、動作很分明，再現了原文的表達效果。

從上面例句中可以看出，不論是並列、轉折、因果遞進以及其他關係的複句，都可以用拆句的方法翻譯。但拆句只是方法，而不是原則，所以，什麼情況下拆句，什麼情況下不拆，全靠譯者根據表達需要決定。

3. 長定語句的翻譯

日語句子長，往往長在定語上。長定語可以修飾主題、主語、賓語、補語、狀語等句子成分。考慮到補語、狀語將專門設題研究，這部分只研究修飾主題、主語和賓語的定語。

3.1 修飾主題、主語

日語定語的排列順序，一般比較靈活（有領屬關係的不能任意改動）；漢語定語的排列順序比較固定，總的說描寫性定語在後（靠近被修飾詞語），限制性定語在前。

例[10]頭からすっぽりと頭巾のついた黒っぽい外套を着て、雪まみれになって、口から白い氣息をむらむらと吐き出すその姿は、實際人間という感じを起こさせない程だった。

○他披著一件黑斗篷，蒙著頭巾，滿身積雪，嘴裏呼哧呼哧地吐著白氣。這副模樣幾乎覺得他不像個人。

將「その姿」的長定語提出單譯成一句話，然後將「その」譯成指量代詞「這副」，代指前面整個句子。

例[11]島村が葉子を長い間盗見しながら、彼女に悪いということを忘れていたのは、夕げしきの鏡の非現実な力にとらえられていたからだろう。(川端康成、『雪國』)

○島村長時間地看葉子，卻沒有想到這會對她有什麼不好。這大概是被鏡中的暮景那種虛幻的力量吸引住了。

將形式體言「の」前的修飾語單譯成句，然後用「這」代指下連。

例[12]磯川ちか女が、正章の女の問題で腹を立てて階段の途中で失神してしまったという噂が私を驚かせたのは、義春の結婚から五年程あとのことで、時代は、その時それから長く続く暗い戦時下へと一步踏み込んでいた。(井上靖、『胡桃林』)

○聽說知加女士因為正章跟女人的關係，氣得暈倒在樓梯上，我大吃一驚。那是義春婚後 5 年左右的事。從那時起，時局已進一步深入漫長而黑暗的年代。

例[13]三メートル四方の小さな部屋に似合わず、ひろびろと見えるのは、壁ぎわによせて置かれた椅子が一つあるだけで、ほかになんにもなかったからである。(安部公房、『魔法のチョック』)

○看上去空蕩蕩的，並不像 3 平方米的小屋。這是因為只有一把椅子靠牆放著，其他便一無所有了。

例[14]私の形のはっきり判らぬ漠然とした愛情のようなものが、自分の、人とは違った無邪気な心の部分をやわらかく押し包んで来るのを感じたのは、その時が始めてでしょう。

○我感到一種飄忽不定、濛濛朧朧，似乎是愛的東西把我不同於人的、天真的心靈溫柔地包裹起來。這種感覺，那時是第一次吧。

例[15]ブラシ電流密度が 3-6A/cm² 程度において使用するときも最も荒損を生じやすいことは種種の文献で報告されている。

○電刷如在 3-6 安培/cm² 左右情況下使用時，最容易發生磨損。這

一點已在一些文獻中有所報導。

例[16]12cmの厚さは、鉄筋コンクリートとして最小限に近い厚さであり、施工上蜂の巣豆板などの欠点が出やすいのは、日常アパート工事などで屢屢見聞するところである。

○12釐米厚的鋼筋混凝土已經接近最小極限厚度，其缺點是在施工中容易產生蜂窩結構。這在日常住宅建築工程中屢見不鮮。

例[17]敗戦で領土は失う、蓄積は尽きる、しかも人口はどんどんふえていくという日本の経済が、自分だけのワクの中でいかにがんばってみても、その効果には限度がある。

○日本因戰敗而喪失了領土，積蓄已經耗盡，而且人口又迅速增加。處於這種情況下的日本經濟，只在自己國家的範圍內無論如何頑強地堅持下去，其效果也是有限度的。

例[18]原子の目方と性質の間に、周期的な関係が成立するということ、原子そのものの本質について、何か暗示するものでなくてはならない。

○在原子的重量和性質之間存在著一種週期性的關係。這個事實應該說對原子的本質作了某種暗示。

例[19]しかし、一方、原子力の誤用が人類に損害をもたらすのと同様に人間の高度の知能を代行する機械も危険を伴うであろうという点には、特に注意を払わねばならない。

○然而，另一方面，正像錯用原子能會給人類帶來危害一樣，代替人類高度智慧的機器也可能帶來危險。對於這一點，必須予以特別注意。

如[10][11]例後簡單說明的那樣，[13]至[19]例也都把句子中的長定語提出來單譯，作為外位成分處理，然後再用代詞在下句話中代指。從這 10 個句子可以看出兩方面特點，一是被修飾語為主題或主語；二是被修飾語為形式體言「こと」「もの」「の」，或以形式用言「という」概括的長修飾語句。

當被修飾語為人稱代詞、人的稱謂或被修飾語前為感覺、思維、語言行為之類的動詞時，往往先把被修飾語作為主語譯出，然後把修飾語譯成主語動作、行為的內容。

例[20]世に敗れて追われている彼は、もう一度女の愛情にたとえ五分間でも甘えたいのだ。(徳富蘆花、『不如帰』)

○他離世索居，萍蹤不定，真想再一次陶醉于女人的愛，哪怕只五分鐘。

例[21]角かくしに華麗な花嫁衣裳、介添役の紋服姿の老婦人に軽くに手をとられ、スラッとした上背の新婦が立っていた。(石沢英太郎、『視線』)

○身材苗條的新娘亭亭玉立。她頭戴白紗頭飾，身穿華麗的嫁衣，由一位身著和式禮服的送親婆輕輕地挽著手。

例[22]かきの貝殻のように、段々のついた、たるんだ眼蓋から、弱々しい濁った視線をストーブの上にボンヤリ投げていた中年を過ぎた漁夫が唾をはいた。

○已過中年的漁夫吐了口唾沫，從他那牡蠣殼般凸凹不平的鬆弛的眼皮裏露出一絲微弱、渾濁的目光正呆望著火爐。

例[23]もし夫が入院しないで、例の通り宅にいたならば、たといどんなに夜更かしをしようとも、こう遅くまで、気を許して寐ている筈がないと思った彼女は、眼が覚めると共に跳ね起きなかった自分を、どうしても怠けものとして輕蔑しない訳には行かなかった。(夏目漱石、『明暗』)

○她想，假如丈夫不曾住院，還像往常一樣在家，不管怎麼熬夜，也不可能這麼放心大膽的貪睡。她總覺得睡醒了也不肯起來的自己是條下賤的懶蟲。

例[24]ありふれたなんの意味も持たないものに思っていた裏の山とか自分の家の前の商店の看板などが、それは依然として裏の山であり家の前の店屋の広告燈でありながら、これまでとは全く違った新しい色彩をもって自分に迫ってくるのである。(野間宏、『人生と文学』)

○一直以為極其平常，沒有任何意義的自家屋後的山巒和屋前商店的廣告等，雖然依然是屋後的山巒、屋前商店的廣告，卻帶著與過去迥然相異的嶄新色彩呈現在自己的眼前。

當然，長定語修飾作為主題、主語的人稱代詞、人的稱謂時先譯被修飾語的做法也不是絕對的，還要根據上下文的關係即漢語表達需要決定。

例[25]三好を中心にした洋行談が一仕り弾んだ。相間相間に巧みなきっかけを入れて話の後を釣り出して行く吉川夫人の手際を、黙って観察していたお延は、夫人がどんな努力で彼等四人の前に、この未知の青年紳士を押し出そうと試みつつあるかを見抜いた。(夏目漱石、『明暗』)

○以三好為中心的西行漫話，一時好不熱鬧。吉川夫人見縫插針，花言巧語地引出下文。阿延默默地觀察著夫人的手段，已經識破她在拼命地企圖把陌生的年輕紳士展示給大家。

3.2 修飾賓語

為了敘述方便，這裏所說的賓語並不局限於與他動詞一起使用的「ヲ格」「目的語」，還包括表示存在狀態的主體與知覺、可能、需用物件的「ガ格」。翻譯這種長定語修飾賓語句式時，一般可先譯被修飾語，然後再譯修飾語。

例[26]私は新聞社の玄関口で、舗道の人波の中に混り、直ぐそこに見えている十字街の方へ歩いて行くちか女の小さい姿を見送っていた。(井上靖、『胡桃林』)

○我站在報社門前，目送著知加女士。她那矮小的身影混入便道上的人流，朝眼前的十字路口走去。

先把修飾語「ちか女」譯出，然後再將「小さい姿」反客為主（邊賓語為主語），具體說「她」的舉動行為。

例[27]ただ、文明の利器はあくまで利器にすぎず、人間がそれを使う立場であることを再確認し、人間が自然の一部にすぎないことをもう一度謙虚に考えて、自然との新しい調和ある共存を真剣に考えないと、人間は人間本来の性質を薄め持った奇妙な存在に堕してしまうだけだということをいいたいのである。

○我只是想說，文明的利器終究不過是利器，如果不再確認人是站

在使用它的立場上，不再一次謙虛地考慮人只不過是大自然的一部分，不認真地考慮與自然取得具有新的調和的共存的話，那麼人只能墮落為沖淡了人的本來性質的奇妙的存在而已。

先將被修飾語「こと」譯出，然後具體說明它的內容。

例[28]十日目の朝、西夏軍の兵たちは行き手のゆるい丘陵の傾斜面を一本の幅広い帯となってこちらに向かって移動している黒い点の集団を見た。（井上靖、『敦煌』）

○第十天早晨，西夏軍的前方出現了一支朝這邊移動的黑團。黑團像一條寬寬的帶子，沿著舒緩的沙丘斜坡行進。因相距甚遠，黑團縮成了一個黑點。

先將被修飾語譯出，然後將修飾語拆譯為兩句，並根據上下文關係作了增譯。

例[29]ふさふさした丈長い髪束をゆたかに胸に廻し、両の手で蕾のように上向いた乳房を押え、美しい泉のほとりにすっくりと立った、あの誇り高い裸女を、これが愛だと教えてある書物を、いつか、おじさまは私の誕生日の贈り物に下さいました。（井上靖、『猟銃』）

○記得姨夫曾送給我一本書作為生日禮物。書上畫著一張高貴的裸體女人像。那女人將濃密的長髮蓬鬆地搭在胸前，雙手按著花蕾般昂然隆起的乳房，在美麗的泉水邊亭亭玉立。令人感到「這就是愛！」

先將被修飾語「書物」譯出，然後將定語拆譯成三句。翻譯長賓語句時先譯被修飾語、後譯修飾語是一般的、原則性做法，具體處理時，還要以符合漢語表達習慣為目標靈活處理，下面的例[32]就是將賓語的長定語一分為二，一部分譯在被修飾語前，一部分譯在被修飾語後。

例[30]私はともかく、ここまでやって来たのだから、もうすこし足を伸ばして、終戦後まだ一度も詣でていないあのオゾンの充滿

している小豆島の丘陵の上の、小ぢんまりとした清潔な一廓を訪ねようと考えていた。

○我想，反正已經來到這裏，何不再多走幾步，到戰後尚未去過的小豆島，造訪一下那位於丘陵之顛、充滿臭氧氣味的一小片淨土吧！

例[31]攘夷論者のなかには、西洋諸国の軍事力に威圧されて開国することは独立を危うくするものであると考え、いったん攘夷して西洋諸国の圧力を退け、そのあとで自らの意思で開国することを説く人びともいた。

○在攘夷論者當中也有這樣一些人，他們認為，在西方各國的軍事壓力之下開港，有損國家的獨立，從而主張趕走洋人，排除西方各國的壓力，然後根據自己的意願開放港口。

例[32]利江の遠い思い出には母親にだかれて玄海灘を渡った夜の暗い甲板とか、熊本の町の濠端に立っていた西南戦争の大きな石碑とかといった、きれぎれな風景が残っていた。

○利江的腦海裏只留下一些遙遠的片斷回憶：被母親抱在懷裏，夜渡玄海灘那陰暗的甲板；聳立在熊本城河邊紀念西南戰爭的大石碑。

例[33]美津子の脳裏に、一度だけ訪ねて、陽の当らぬ四畳半に盲目の老母が火災を案じて火もいれずに暮らしている部屋がうかんだ。

○美津子的腦海裏浮現出了那間僅去過一回的屋子。那是一間只鋪得下四張半「榻榻米」、陽光照不進的斗室；瞎眼的老母就住在裏面，由於擔心火災，連火也沒生。

例[34]彼が大きい溪谷を隔てた川向こうにある鍛冶屋のせがれであること、他の少年たちとは違ってひときわ目立つたくましい体格を持った腕力の優れた少年だということ、そんな印象ぐらいのものである。

○留給我的印象，大抵是這樣——他是鐵匠的兒子，家住山谷那邊，大河的對岸；他和其他少年不同，體格魁偉，腕力過人。

例[30]～[34]都是以「が」表示存在、狀態的主體和知覺的物件的句子，這類句子翻譯時，也先譯被修飾語，然後譯修飾部分。

4. 長補語的翻譯

日語的補語種類很多，有語法家把賓語（「目的語」）也作為「ヲ格」「補足語」（益岡隆志・田窪行則、『基礎日本語文法』）。為方便研究，本文已將「ヲ格」「補足語」作為賓語單獨提出，因此這裏的補語指「ニ格」「カラ格」「ト格」「デ格」「補足語」。

例[35]土曜日になると、三弥子は離れの前の庭を掃き、塵一つとどめないようにして、水車小屋のある坂を上がって来る高介の眼に、田舎でしか絶対に見られない住いの清楚な感じを与えようとした。（井上靖、『霧の道』）

○一到星期六，三彌子便把門庭掃得一塵不染，她要給從河水旁的山坡走下來的高介眼裏留下一個只有鄉村人家才有清新之感。

例[36]佐分權助は……氣性が荒かった。粗雑な物言いにも、われた大声にもそれは出ていたが、何よりも、鬼がわらのような四角い顔の角ばったしゃくれた顎に出ていた。（水上勉、『越後つついし親不知』）

○佐分權助……性情暴躁。這在他粗魯的言談和破鑼般的大嗓門上都有所表現。但更突出的是表現在他那獸頭瓦般的大方臉上有稜有角的醬碟下巴上。

例[37]津田は他から機嫌を取られ付けている夫人の常として、手前勝手にいくらでも変わって行く、若くは変って行っても、差支えないと奉つらなければならない地位にあった。（夏目漱石、『明暗』）

○讓別人取悅於她，這是夫人的習慣。必須捧她的場，讓她隨心所欲地變來變去，或者說怎麼變也不介意。津田正是處於如此境地。

例[38]その日編輯局長の津上は社告の載った假刷が刷り上ると、それを一枚ポケットに入れて、長いこと寒い応接間に独り待たせておいた田代と連れ立って、二三日来すっかり本調子の寒さになって、いかにも師走の街といった感じの、冷たい風が落着かなく地

面から吹上げて来る午後の街路に出た。(井上靖、『闘牛』)

○那天，刊登公司公告的清樣一打好，編輯局局長津上便拿起一張裝進衣袋裏，會同讓在客廳一個人久候的田代，來到午後的街頭。兩三天來，天氣已真正地變冷，宛如臘月的寒風不停地卷地而來。

例[39]午後の陽が斜めに射し込んでいる部屋で、小宮ときぬ子は向い合って坐った。(井上靖、『霧の道』)

○午後的斜陽射進房間，小宮與絹子相對而坐。

例[40]裏切られた口惜しさと、信じつづけて来たおのれの空しさとに、留吉は足が宙に浮いた。(水上勉、『越後つついし親不知』)

○由於遭到背信棄義的懊悔和長期信任的落空，留吉心裏七上八下。

例[41]疎開生活を打ち切って、一年半振りで東京で親子三人水入らずの落ち着いた家庭を持つようになってからもずっと三弥子には、この精神の平穩さは続いた。(井上靖、『霧の道』)

○疏散生活結束，回到闊別一年半的東京，一家老少三口得以平靜地生活。那以後，三彌子也一直保持著這種精神上的平穩。

例[35]～[41]7例中的「に」「で」「から」分別表示存在場所、移動到達點、動作對方、原因、時間的起點、公共動作者、動作的場所等，這些長補語的翻譯很難找出較固定的形式，只能根據具體情況靈活掌握，如[35][36]採用了順譯的方法；[37]則把補語的修飾語先行譯出，然後用「如此」代指修飾語，最後譯出補語；[38]有兩個長補語，對面前的「ト格」補語修飾語採取順譯方法，對後面「に格」補語採取拆譯的方法，即先譯出補語「街路」，然後把「街路」的定語獨立成句譯出；[39]按漢語習慣，調整了語序；[40]基本為順譯；[41]先將補語修飾語譯成一句話，然後用「那以後」代指前面內容並連接下文。

還有一種由「引用助詞『ト』」構成的補語，翻譯時倒是有規律可循，即採取倒譯方法，先譯出謂語，再譯引用內容。

例[42]私はこれまで花山竜之進に近付いて行く気持をみじん

も起させなかったものは彼が学者であるということではなくて、彼の夫人であるかつらの存在であつたと思った。

○我心想：過去所以完全無意跟花山龍之進接近，倒並不因為他是學者，而因為他太太是阿桂。

例[43]三歳の息子の手を引いて通りを歩きながら、私はこの子にも当分の間はあの自転車で練習させて、上手になったら新しいのを買ってやればいいと言ひ訳がましく考えていた。

○我拉著三歲的孩子的的手，一邊走，一邊好像為自己辯護似地想著；讓這個孩子先暫用這輛車練習，等學會了再給他買個新的也就是了。

例[44]そんな大きい厚い本をもっている人は、どこを捜してもいないのだ、父だけがそんなすばらしい本をもっているのだ、そして父だけがこの本に書かれてあることを全部知っているのだ、とわたしは信じていた。

○我相信：有這樣大部頭的書的人，在哪兒也難以找到，只有我的父親才有這麼好的書，只有我的父親才知道書裏寫著的全部事情。

例[45]農薬による化学成分の残存の問題といい、天敵の大量死滅の問題といい、工場廃液の問題といい、すべてこの自然の大きな秩序に対して、人間が無神経で、傲慢な振る舞いに出たために自然から大きな復讐を受けたのだと思わないではいられないからである。

○因為農藥引起的化學成分殘留問題也罷，天敵昆蟲的大量滅絕問題也罷，工廠廢液問題也罷，這一切都不能不認為是：面對自然的偉大秩序，人們神經遲鈍、表現出傲慢的行徑，因而受到大自然的嚴厲報復。

例[46]今後に人間が新しい化成物を人間の生活に取り入れる場合には、その影響を大きな自然の秩序の中で考えて、かなり長い時間の流れの中で検証し直すという手続きの重要性をもっと真剣に考慮しないと、ますます多数の不幸な犠牲者を出し、それどころか人類そのものの未来を破滅に導くということさえなきにしもあらずだという気がしてならないのである。

○我深切感到：今後人們在生活中採用新的化合物時，如果不在大自然的秩序中考慮它的影響，不更認真地考慮在相當長的歲月中重新進行驗證的過程的重要性的話，將產生越來越多的不幸的犧牲者，甚至還有可能導致人類本身未來的毀滅。

例[47]あのスーツをしっかりと着込んだ小柄な老人は、今頃もやはり、あの同じパブのカウンターで同じタラモア・デューのグラスを傾けつつ、何かについての真剣な考察をつづけているはずだ、と僕は確信している。(村上春樹、『もし僕らのことばがウイスキーであったら』)

○我確信，那位整齊地穿著西服的小個子老人，此時還應該在那間相同酒吧的吧台，喝著相同的特拉莫爾·杜，並繼續認真地進行著關於某種問題的考查。

例[48]地下鉄にサリンをまいた信徒は法廷で、教団の現在の幹部に「信徒をだまし、その人生を利用し、傷つけるのはやめてほしい」と呼びかけた。

○在地鐵施放沙林毒氣的信徒在法庭上呼籲教團現在的幹部「不要再騙信徒，不要再利用他們的人生，不要再傷害他們」。

从上面7个由「引用助词」「ト」構成補語的句子可以看出，這種句子的謂語往往是感覺、思維、語言行為動詞。

5. 長狀語的翻譯

例[49]秋が来た。うすい青空が高く晴れわたり、そこへ羽毛をプット吹き散したように、軽い綿雲がいちめんにかんている。(石坂洋次郎、『青い山脈』)

○秋天來了。淡蘭色的天空一碧萬裏，輕輕的白雲漂浮在空中，仿佛像撲的一口氣吹散的羽毛。

例[50]姉はひっそりと微笑した。初めて会った日のように、妖精のように、神秘的な微笑だった。

○姐姐悄悄一笑。那笑就像初次見面那天一樣，是一種仙女般的、神秘的微笑。

例[51]この話は、現代の子供たちが自然というものからどんなに断絶した生活を営んでいるかということを象徴的に示しているように思われる。

○可以想見，這件事象徵性表示出現代的孩子過著與自然多麼隔絕的生活。

例[52]人の一生には、なすことなすこと皆凶星をはずれて、さながら皇天ことにわれ一人をえらんで折檻又折檻の筈を続けざまにうちおとすかのごとくに感ぜらるる、いわゆる「泣き面に蜂」の時期少しも一度はあるものなり。（徳富蘆花、『不如帰』）

○人的一生，命運多舛，仿佛令人感到皇天只單選一人，進行永無休止的折磨。常言說：「黃蜂偏蜇淚人面」，如此不幸的時期，至少都有過一次。

例[53]そこへ来ると私はいつも今が今まで私の心を占めていた煮え切らない考えを振るい落としてしまったように感じるのだ。（梶井基次郎、『闇の絵巻』）

○一來到那裏，我直感到似乎抖落了此前一直佔據我心頭的猶豫不決的想法。

日語中由「動詞＋助動詞連用形(ように)」構成的狀語使用頻率很高，一般譯成「仿佛像……」「像……一樣」（例[49][50]）；當謂語是感覺、思維、語言行為動詞、被「ように」「ごとくに」修飾時，也常常像例

[51][52][53] 那樣，將謂語先譯出，然後再譯「ように」「ごとくに」的具體內容。

例[54]私にはこの頃の母さんの背後姿が、殊に肩から左右の腕へかけての線が何故か、いやあな気がする程、淋しく感じられてありませんでした。（井上靖『獵銃』）

○不知為什麼，此時此刻母親的背影，特別是從雙肩到兩臂的線條，使人感到十分淒涼，甚至看一眼都難受。

例[55]不意に襖ががらりとあいて、小柄な色白な、けわしい目差をした女が中を覗きこんだ。酒によっているとすぐわかるほど、

身体をもちあぐねるように泳がせながら、女は佐喜枝をさげすむように流し眼をぎらぎらとなげていた。(田宮虎彦、『銀心中』)

○突然，拉門嘩啦一聲開了。一個個頭不高、面皮白嫩的女侍者用兇狠的目光注視著屋裏。一看就知道。她由於喝多了酒，身子像要倒下似的東搖西晃，用斜眼向佐喜枝投來輕蔑的目光。

日語中，由「動詞＋ほど（に）」構成的狀語也常常出現，翻譯時一般可將「ほど（に）」前的修飾語譯成結果補語，例[54][55]都是這樣處理的。

由動詞「テ形」構成的狀語，一般表示被修飾動詞動作的方式或物件的狀態。

例[56]父の書齋に忍び込んだとき、わたしは必ず、いつも父の大きな机の右のすみに置かれているウェブスターの辞書をそっと広げて、グラビアの図版をながめて楽しんだ。

○每當溜進爸爸的書屋，我總要偷偷翻開放在大寫字臺右角上的烏艾布斯達詞典，欣賞裏面的凹版插圖。

例[57]私はM村のことを話題に載せようとしたが、途中で彼女の硬い顔がこちらに向けられているのを感じて、あるいはそれを聞くのがちか女は厭かも知れないと思って、それを止めた。(井上靖、『胡桃林』)

○我本來想提M村的話頭，可是說到半截，我注意到她沖我板著臉，我想，或許是不愛聽吧，也就打住不說了。

例[58]射撃手達は、なだらかな傾斜の崖にむかって、鳥のように走る白いカワラケをねらって発射するが、崖の奥で地ひびきをたててゆらいている弥助のくずれかけたバラックのあることには気がついていなかった。

○射手們朝著緩坡的山崖，瞄準雞一樣奔跑的陶器射擊，然而，卻不曾覺察到山崖裏彌助那間行將坍塌的木板房正搖搖欲墜，吱吱作響。

例[59]だからきぬ子は、無事に帰還した小宮が三弥子と結婚したと云う噂を初めて耳にした時、ああ、又あの二人は結婚していな

かったのかというような意外な気持が、幾の回顧的な感慨を伴って心に湧き起って来たのであった。(井上靖、『霧の道』)

○因此，當絹子剛聽到平安回國的小宮同三彌子結婚的傳聞時，心裏一驚，並泛起了幾絲回首過去的感慨：怎麼，原來她倆沒有結婚呀！

例[60]さすがに春の燈火は格別である。天真爛漫ながら無風流極まるこの光景の裏に良夜を惜めとばかり床しげに輝やいて見える。(夏目漱石、『吾輩は猫である』)

○不愧是春天的燈火，的確異乎尋常。它天真爛漫卻又不諳風雅地閃爍，仿佛告訴人們：要珍惜這良宵月夜。

例[56][57][58][59] 中的「テ形」狀語為表示動作以什麼樣的方式進行的；例[60] 表示物件的狀態。在翻譯中，表示動作方式的「テ形」狀語，一般都譯成漢語謂語，表示物件狀態的一般譯為結果補語。

6. 時間、地點優先

當被修飾語是表示時間、地點的詞時，根據漢語表達習慣，一般把被修飾語譯在句首，而把它前面的修飾語譯在後面。

例[61]知恩院の桜が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない、珍しい罪人が高瀬舟にのせられた。(森鷗外、『高瀬舟』)

○一個春天的傍晚，知恩院的櫻花在深沉的晚鐘聲中紛紛落飄。一個古今少有的特殊犯人被帶上了高瀬舟。

例[62]天候や潮流の変化の観測が出来なかったり、地理が実際にマスターされていなかったりした創業当時は、幾ら船が沈没したりしたか分らなかったそうだ。

○聽說當初創辦的時候，不是觀測不了天氣、潮流、就是沒能切實掌握地理，也不知道沉了多少船呢！

上面兩個句子中的被修飾語都是時間狀語，譯在前面，讀起來順口，符合漢語表達習慣。如果按原文語序翻譯，讀者恐怕就難以接受。

例[63]私が突然、新聞社にちか女の訪問を受けたのは、それから一ヵ月程した三月の半ばの寒い日であった。（井上靖、『胡桃林』）

○約莫一個月以後，三月中旬的一個冷天，知加女士突然到報社找我。

例[64]私が再び東京へ舞い戻って来たのは、二十八年の二月であった。

○昭和二十八年二月，我再次回到東京。

例[65]山岸に沿うてながるる溪流がここでひとまわりするその岸に二三十軒の田舎町ができています。

○這裏的河岸上，有一座二、三十棟房子的鄉鎮。沿山流淌的溪水到這裏正轉了一圈。

結 論

長句是日語的一大特點，也是日漢翻譯的難題。翻譯長句應以譯文符合原意並且在結構形式上符合漢語表達習慣為原則。翻譯長句時應首先通過分析搞清句子結構、成分，然後根據具體情況，採用倒譯、拆譯、代指等不同的翻譯方法。實踐證明，下列幾點是較有規律性的：

1. 當被修飾語為「こと」「もの」「の」等形式體言，並在句中做主題、主語時（包括由形式用言「という」概括的長修飾語句），一般把長修飾語提出單譯，作為外位成分處理，然後再用代詞等在下句話中代指。

2. 當被修飾的主題、主語為人稱代詞、人的稱謂或被修飾語前為感覺、思維、語言行為之類的動詞時，往往把被修飾語作為主語譯出，把修飾語譯成主語動作、行為的內容。

3. 當被修飾語為「ヲ格」賓語、「ガ格」存在、狀態主體、知覺、可能、需要物件時，一般可先譯被修飾語，然後再譯修飾語。

4. 當補語由「引用助詞ト」構成，謂語是感覺、思維、語言行為動詞時，翻譯可採取倒譯的方法，即先譯出謂語，再譯引用的具體內容。

5. 當「ように」「ごとくに」作為狀語修飾感覺、思維、語言行為動詞謂語時，一般可將謂語先譯出，然後再譯「ように」「ごとくに」前面的內容。

6. 遵從漢語時間、地點優先的原則，當被修飾語為表示時間、地點的詞時，一般要把被修飾語譯到句首，然後把它們的修飾語譯在後面。

参考文献

于 雷、『日語文學翻譯例話』、瀋陽：遼寧大學出版社、1993。

陳 岩、『新編日譯漢教程』、大連：大連理工大學出版社、1990。

『日語學習與研究』、（北京：對外經貿大學、1979-1988）

